障害科学研究, 41, 121－133, 2017

資　料

昭和戦前・戦中期富山県の感化院・少年教護院における職業教育の実科からの分化とその要因

立浪　朋子

本研究では、昭和戦前・戦中期における富山県立樹徳学園の職業教育の実科からの分化とその要因を明らかにすることを目的とする。樹徳学園では実科として主に農業が実施されていたが、その目的は人格・性情の陶冶、不良化の改善、勤労精神の育成などであり、農業で自活を可能にしようとする意識は希薄であった。農業による実科は全国的な傾向であり、その理由は農業の陶冶効果が認められていたこと、より職業に結びつく実科は実施が困難だったことであった。樹徳学園は後援機関を通じて授産場を設立し、職業教育の実科からの分化という過程を取ることで職業教育を実現した。授産場ではミシン裁縫および西洋洗濯と二種の職業を用意し、子どもの適性に合わせた教育を実施しようとした。職業教育を実施できた要因は授産場設立のための財政支援および専門家の協力が得られたことであった。

キー・ワード：富山県　感化院　少年教護院　実科　職業教育

Ⅰ．はじめに

昭和戦前・戦中期の感化院（昭和９年以降は少年教護院）は、不良行為をなす、あるいは不良行為をなすおそれのある子どもを対象としており、現在の児童自立支援施設の前身となった施設である。

我が国の感化院は、1880年代から90年代にかけてまず民間によって設立され、1900（明治33）年の感化法公布によって府県立感化院を設置する制度が成立した。さらに1908（明治41）年の感化法改正により府県に感化院の設置が義務づけられ、３年後の1911（明治44）年までに各府県に感化院が設置された（二井［2010］21, 170; 社会局［1930］47-68）。その後、感化院は1934（昭和９）年の少年教護法施行により、少年教護院と名称を改めた（厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課［2014］16）。

感化院・少年教護院の実践に関わった人物のなかでも、現代においても「感化事業の父」として高く評価されているのが1899（明治32）年に東京・巣鴨に私立感化院、家庭学校を設立した留岡幸助（1864-1934）である（厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課［2014］16）。留岡は農業に「天然の感化力」を認め（二井［2010］220）、不良少年の感化に農業ほど効果のあるものはないと考え農業の力を信頼していた（二井［2010］221-222）。そのため、家庭学校では子どもに対し午前中は学業を授け午後は労働を課していたが、労働の内容は農業を第一とした（二井［2010］107-108）。さらに留岡は、農業を行うことで子どもの成長を目指し卒業後も定住できる「コロニー・システム」を構想し、1914（大正３）年には北海道に家庭学校の分校および農場を開設した（二井［2010］216-223, 344）。

留岡が家庭学校で行ったような農業実践は、

筑波大学大学院人間総合科学研究科

昭和期の少年教護院においても見られた。1934（昭和9）年に施行された少年教護法施行令第五条に定める実習を少年教護院では実科、実科教育あるいは実業科実習などと呼び、子どもは午前に学科、午後に実科を行った（佐々木［2012b］169）。実科の目標は佐々木（2012b）によれば、①体験的な実習を通じ、不良の改善を図ること、②職業技能を身につける職業教育を行うことであった（佐々木［2012b］170）。実科はどの施設でも行われていたが、大多数は農業であった（感化教育会［1928b］85; 佐々木［2012b］169）。

佐々木（2012a; 2012b）は全国の少年教護院に関する実科の全体像について、膨大な資料を整理・分析し明らかにしている。また、佐々木（2012b）は農業によって「情操の陶冶」を図ったこと、大規模な施設の実科では将来の職業となる、自活のための職業教育も図られたこと、戦時体制が強化されるにつれ、実科の目的が人格・性情の陶冶、勤労精神の育成から、心身の鍛錬、食糧の増産に変化していったことを指摘している（佐々木［2012b］172-245）。だが一施設の実科の目的や内容がどのように変容していったのかについて詳細に論じるものではない。

感化院・少年教護院の施設史を論じた先行研究としては、東京感化院、千葉感化院に関する長谷川仏教文化研究所／淑徳大学アーカイブズ（2011）、留岡と家庭学校に関する二井（2010）、田澤（1999）、高瀬真卿と東京感化院に関する長沼（2011）、『萩山実務学校五十年史』（萩山実務学校，1951）など各施設の記念誌等がある。それぞれ各施設の通史や院長の思想などについて重要な事実の発見や考察がなされているが、実科の内容や役割の変遷については十分に明らかではない。

昭和戦前・戦中期においても多くの感化院・少年教護院で農業が実践された理由は、留岡の影響だけでは説明できないだろう。農業が実科の中で実際にいかなる比重を占めてきたか、なぜ多くの施設で農業が実践されたのか、感化院・少年教護院の実科にはいかなる変容が見られたのかについて、さらなる検討が必要である。そこで本研究では、昭和戦前・戦中期の感化院・少年教護院における実科および職業教育の目的、内容の変容とその要因について明らかにすることを目的とする。

研究対象は富山県立樹徳学園（以下，樹徳学園）とする。樹徳学園は、1909（明治42）年に富山県の代用感化院の指定を受け、1916（大正5）年には県立感化院となった。現在の名称は富山県立富山学園（児童自立支援施設）である。樹徳学園を研究対象とする第一の理由は、樹徳学園が実科に農業を取り入れていたためである。第二の理由は昭和期に入ってから定員および敷地面積を拡大しているためである。したがって、当時の院長らが実科における実践困難の理由として挙げる施設規模の問題について考察することが可能である。考察にあたっては、感化院・少年教護院の実科および職業教育の全国的な状況も検討し、樹徳学園の実科および職業教育の全国における位置づけを踏まえるものとする。そのため分析の観点として、①樹徳学園の実科および職業教育における農業の位置づけ、②樹徳学園の実科および職業教育に見られる変化、③実科および職業教育の変化における全国的な傾向と樹徳学園の特徴という3つの観点から分析を行う。

研究対象とする時期は、留岡の実践から時期を経て、感化院・少年教護院の実践内容に変化が生じていると考えられる昭和初期から、太平洋戦争に伴い戦時体制が強化され、勤労動員の実施、学科の停止、食糧不足などにより少年教護院の実践が困難になっていく（佐々木［2012a］286-323）直前の1942（昭和17）年頃までとする。樹徳学園に関する先行研究としては、まず創立80周年記念誌（富山県立富山学園，1989）、100周年記念誌（富山県立富山学園，2009）等がある。これらの記念誌は戦前から戦後および現代も含めた記録であるため、戦前・戦中期については簡潔に記されているのみであり、この時期の実科および職業教育の詳細まで記載されてい

るわけではない。また、鈴木・勝山（2001）の『感化院の記憶』は樹徳学園に関する貴重な資料を数多く発掘しその歴史を掘り起こしているが、樹徳学園の創立前から昭和初期頃までを中心としており、それ以降については十分検討されていない。全国教護協議会（1964）の『教護事業六十年』では、明治期以降から太平洋戦争中の樹徳学園の状況を記載しているが（全国教護協議会編［1964］119-122）、昭和戦前・戦中期の具体的な処遇内容を詳細に示されてはいない。

主な資料としては、樹徳学園およびその後援機関の要覧、決裁文書、規則集、富山県の社会事業雑誌等を用いる。また、感化院・少年教護院の全国的な状況を把握するために感化院・少年教護院に関する全国誌および院長会議録等を用いる。

なお、本研究は歴史的研究であり、用語は当時の表現を用いる。

Ⅱ．樹徳学園における子どもの実態と処遇内容

1．子どもの実態

1935（昭和10）年発行の「本県少年教護事情と其の実際」では、樹徳学園に入る必要のある子どもを「教護少年」と呼んでいる。また、「不良少年」ではなく「教護少年」と呼ぶ理由について次のように述べている。すなわち、少年教護院に入る子どもの多くは、あえて不良行為をしなければならない背景がある、そのため人道上彼らの人格を認め、差別的もしくは軽蔑的な言葉を与えるべきでないからだという（富山県［1935］1-2）。

不良行為をしなければならない背景とはいかなる背景であろうか。樹徳学園では、不良化の原因として素質（遺伝的，先天的）および環境（後天的）が考えられていた。遺伝的とは父母又は祖先の性格気質を継承すること、先天的とは父母または祖先の病的関係ならびに胎育中に受けた障害、後天的とは出生後における障害または家庭や環境による不良化である（富山県［1935］2）。具体的には、父母のいない者や貧困家庭出身の者が多かった（富山県立樹徳学園［1936］9，12-13）。また、学力も低く尋常小学校を卒業したが2年生程度の学力しかない者もいた。「低能児の多いことも窺われる」（富山県［1935］11-12）状況であったが、1939（昭和14）年にはいかなる測定方法を用いたかは不明であるものの樹徳学園の子どもの知能が測定されており[11]、半数近くが魯鈍以下という測定結果が出た（富山県立樹徳学園，1939）。このように樹徳学園では子どもの不良化の発生原因は精神薄弱、貧困、父母の不在、家庭不良など素質や環境によるものであり、樹徳学園は人々に対し、不良の子どもに対して不快の感情を抱くのではなく同情すべきだと訴えたのである（富山県［1935］2-5，12-13）。

樹徳学園のように、貧困家庭の子どもや知能検査で低い値の出る子どもが多数存在する状況は、全国の施設で共通して見られたことであった（山崎［1999］2-6）。そのため1920年代半ば以降、低能児等のための特別学級が各地の感化院で設置されるようになった（山崎［1999］8）。

2．処遇内容

樹徳学園は1928年（昭和3）年には定員25名となっており、この時期は全国的に見ると比較的小規模な施設であった（感化教育会［1928b］77-80）。しかし、昭和に入ってから25名から50名まで定員を大きく増やしている。1939（昭和14）年の樹徳学園の定員は50名であるが、1940（昭和15）年の調査によれば、少ない施設で秋田県の千秋学園の18名、多い施設は大阪府立修徳学院の204名となっている（菊池［1943］336-337）。50名という定員は全国の感化院のほぼ中間に位置しており、この頃には標準的な規模の施設となっていた（菊池［1943］336-337）。敷地面積も1933（昭和8）年に移転した際に耕作地が約1,800坪から約5,000坪となり、大きく拡大した（富山県立樹徳学園［1929］2;［1936］3）。

樹徳学園では子どもに対し小学校に準じた「学科教育」、「実科教育」、家族舎での「家庭の躾」、朝礼式や偉人祭などの「道徳教育」、市場や工場への見学、神仏参拝などの「社会教育」、

そのほか「慰安娯楽」として温泉地・景勝地への旅行、水泳、音楽会、活動写真の鑑賞などが行われていた（Fig. 1）。他府県の施設同様、午前中に学科、午後に実科を行う日課であったが、夏季のみ午前中に実科を行い、学科は午後にまわされていた。また、冬季は通常5時起床を1時間遅らせ6時起床となっていた（富山県立樹徳学園［1936］16）。季節の条件に対応した日課を組んでいたことが窺える。実科教育では農業のほか、風船張り、竹細工、後援機関である富山成徳会（以下，成徳会）[2] でミシン裁縫等を行っていた（富山県立樹徳学園，1935; 富山県成徳会［1936a］3）。

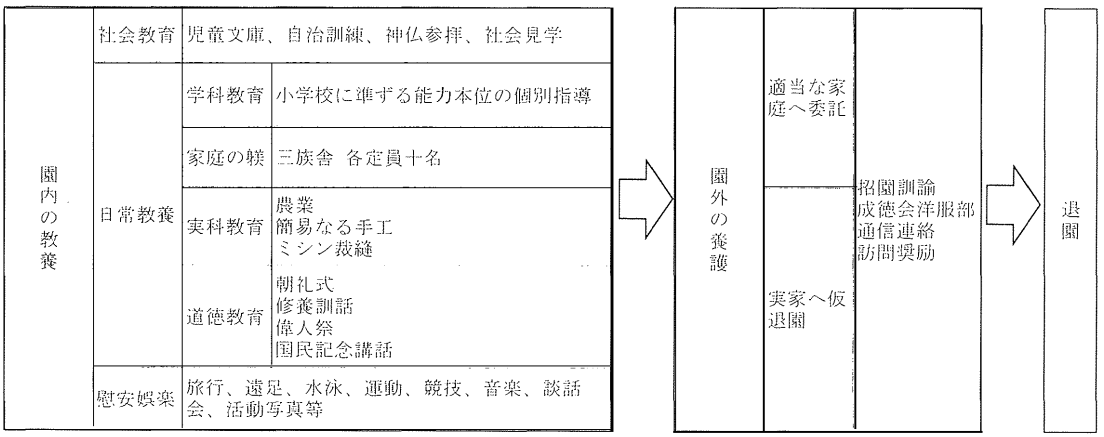
留岡が家庭学校で採用した影響および感化院において最も適切な制度と認められたことにより、全国の感化院で広く家族制度が採用されていたが（社会局［1930］70-71）、樹徳学園でも夫婦の職員と子どもたちが家族舎で共に生活する家族制度を実施していた（富山県立樹徳学園［1933］299）。食事では量を十分に与えることが重視された。肉魚類を与える、間食をさせることも考慮された（富山県立樹徳学園［1933］23）。その他、月に一度程度二宮尊徳、楠木正成、赤穂浪士らの話を聞かせる偉人祭が行われたほか、書初めや修学旅行、海水浴などの行事が実施された（富山県立樹徳学園［1936］21-24）。その後、職人の家庭などに委託して職業教育を授ける、または自宅に帰ることとなったが、その時期の決定は樹徳学園の職員にとって慎重を要することであった（富山県立樹徳学園［1933］28-29）。

これら樹徳学園の実践内容は、学科および実科があること、家族制度を採用していること、娯楽が用意されていること等、佐々木（2012a; 2012b）が示す当時の他の感化院・少年教護院と多くの点で共通している。富山県で盛んであった売薬の土産品を製作する紙風船張りを実科に取り入れたり（富山県立樹徳学園［1929］24）、夏季に実科と学科の時間帯を逆にする対応など、他の施設ではあまり見られない樹徳学園独自と思われるものもあるが、樹徳学園の実践内容はおおむね全国的な傾向と大きな違いはないと言える。

Ⅲ．農業を中心とした実科の意義と課題

1．農業を中心とした実科の内容と目的

1929（昭和4）年頃の樹徳学園の実科は、農業、手工であった。農業は自然に対する認識力の啓発、自然に対する愛着、人格・性情の陶冶、勤労の良習の養成、心身の発達などを目的に花弁野菜類の栽培、稲作を行った。この頃の農業の詳細は不明であるが、1935（昭和10）年の記



出典：富山県立樹徳学園（1933）体系図を基に作成

Fig. 1　富山県立樹徳学園の処遇内容

録によれば、稲、麦、野菜は葱、甘づら、大根、瓜、馬鈴薯、人参、南瓜、花はバラ、ゼラニウム、ダリヤ、牡丹などを栽培しており多彩な内容であったことがわかる（富山県立樹徳学園, 1935）。加えて、1929（昭和4）年頃には冬季や雨天など農業のできない時に手工として紙風船張りを行った（富山県立樹徳学園［1929］24）。これは心身に欠陥ある子どもが多いという認識から、実科は職業教育も目的としながらも実際には身体の鍛錬と人格・性情の陶冶に重きを置いており、そのために農業を主とし手工を併せ行うものであった（富山県立樹徳学園［1929］23）。1935（昭和10）年頃には竹細工、縄ない（冬季）なども行っていたが、これらの作業が可能な一部の子に限られた。紙風船張りはより簡易であり、多くの者が行える作業であった（富山県立樹徳学園, 1935）。

農業の収穫物は施設で副食または間食として消費し、手工などの工賃の一部は各自の仕上げ高に応じて給与の上貯金させた（富山県立樹徳学園［1931］23）。つまり、実科は施設運営への活用や子どもの将来に向けた貯蓄という意義もあった。このほか鶏、兎、豚を飼育しており、糞尿が生じるため農作物の肥料の自給にも役立っていた（富山県立樹徳学園, 1935）。

職業教育というよりも人格・性情の陶冶などに重きを置き、農業を主な作業としている樹徳学園の実科は、当時の我が国の感化院・少年教護院全体から見て一般的だったのだろうか。

我が国の感化院の先駆とされる家庭学校では創立者の留岡により感化院の子どもに農業をさせることを重視していた。同様に、明治期の東京感化院においても農作業の持つ「更生の効果」は認識されていた（長谷川仏教文化研究所/淑徳大学アーカイブズ［2011］28）。さらに、感化院における農業の実践は明治期だけでなく、昭和期においても全国で実施された。1928（昭和3）年には、すでに各府県に設置されていた感化院の9割が実科として農業を行っていた（感化教育会［1928b］86-90）。農業は感化院の実科の典型と言える。

なぜ、全国の感化院で農業が行われていたのだろうか。まず、農業は情操の陶冶、忍耐力、勤勉、勤労精神などを育成するのに適していると考えられていたためである（佐々木［2012b］180-185）。つまり、樹徳学園もそうであったように農業が子どもの将来的な職業に結びついていたためではなかった。たとえば、長野県波多学院（以下，波多学院）では「人格の陶冶」を目的に農業をしていたが、退院後に農業に従事する者は稀であった（富山県［1931］26）。実科は農業を主としていたが、農業の職業教育を目的とするものではなかったのであり（長野県波多学院［1930］24）、退院後の職業は手工業に従事することを推奨していた（長野県波多学院［1930］39）。このように、農業は多くの感化院・少年教護院で実科として実施されていたが、樹徳学園同様、職業教育としてよりも人格・性情の陶冶に効果が期待されていたためであった。農業のほかには木工、印刷、ミシン裁縫、竹細工、藤細工、などを実施する施設が多かったほか、女子には裁縫、編み物を課していた（感化教育会［1928b］86-90）。これらは、樹徳学園の紙風船張りと同様に農業が困難な時期の作業として人格・情操の陶冶や不良の改善のために実施していた場合と、将来の職業として自活する技術を取得するための職業教育として実施する場合があった。波多学院の場合は前者であり、農業のほか季節によって藁細工、紙細工、練炭製造、簡易な木工等も課していたが、これらも職業教育のためではなく「性情の一般的陶冶」のためであり（長野県波多学院［1930］24-25）、冬季など農業が困難な時期に行われた（富山県［1931］26）。

樹徳学園の実科は、1929（昭和4）年頃には職業教育も目的に挙げつつも人格・性情の陶冶や勤労の精神の育成を第一の目的としていた。しかし1931（昭和6）年頃になると、自活の基礎を作ることが人格・性情の陶冶と同等の重みで実科の目的に加わり、それまでよりも実科における職業教育の意味が強くなってくる。さらに、この時期にはそれまでの農業や紙風船張り

の作業に加え、ミシン裁縫も実科として行うようになった（富山県立樹徳学園［1931］23）。これは、後援機関である成徳会が1929（昭和4）年に授産場たる会館、成徳館を設立し、ミシン裁縫を開始したことによる。農業や紙風船張りだけでなく「これで自活ができる」（定塚［1935］16）生業を授けるためであった（定塚［1935］16）。授産場は退園者、仮退園者を対象としたほか、樹徳学園に在園する子どもも適当と認められた場合はミシン裁縫に従事した（富山県［1931］43; 富山県立樹徳学園［1931］27-30）。さらに、1936（昭和11）年には成徳会が授産場を新築し、新たに西洋洗濯を開始した。このように樹徳学園の実科は、授産場が実科における職業教育の部分を担当することで、人格・性情の陶冶だけでなく職業教育も重視するようになっていく。

佐々木（2012b）は、規模の小さい施設よりも、大阪、京都など大きい施設でより職業教育的な実践が見られたことを指摘している（佐々木［2012b］186）。だが樹徳学園の場合、定員や面積が大きく拡大するのは1933（昭和8）年に奥田村から浜黒崎村へ移転して以降であり、すでに職業教育の実践が始まった後のことであった。樹徳学園は戦時体制への対応が比較的ゆるやかだったこともあり（佐々木［2012b］212-223）、1939（昭和14）年の樹徳学園の実科の目的は、すでにミシン裁縫が実施され職業教育が行われていた1931（昭和6）年から目立った変化は見られず、1933（昭和8）年の規模拡大による影響は大きなものではない。すなわち、1939（昭和14）年においても実科の目的は自然への親しみや人格・性情の陶冶、心身の発達のための農業、そして自活の基礎を作るためのミシン裁縫や手工であった（富山県立樹徳学園，1939）。したがって、施設規模の拡大以前と以後で実科の目的がより職業教育に近づいたわけではなく、規模の拡大が始まる前に行われた授産場の開設によって職業教育の実施という変化が始まっているのである。

樹徳学園の各年の退園・仮退園児の進路は不明であるが、1909（明治42）年の開園以来、1933（昭和8）年までに退園、仮退園等となった者100名のうち、農業に進んだ者はわずか11名となっている（富山県［1933］14）。以後も1939（昭和14）年には183名中13名（富山県立樹徳学園，1939）、1941（昭和16）年でも210名中14名（富山市社会課［1943］39）と、実科で農業を重視していたにもかかわらず農業を進路とする者はごく一部であった。このように、樹徳学園では施設規模が拡大するきっかけとなった浜黒崎村への移転以降に農業の職業教育としての意味が強くなったとは言い難い。施設規模の拡大後も、農業は職業と結びつかないままであった。むしろ樹徳学園の実科に変化が確認できるのは、規模拡大以前の1929（昭和4）年頃から1931（昭和6）年頃である。この時期に実科の目的に自活の基礎が加わり、成徳会によって自活を目的としたミシン裁縫が行われるようになった。つまり、農業以外の新たな作業の導入により、実科の内容がより職業教育の意味を強めていたのである。

2．農業を中心とした実科の課題と全国的な傾向

実科が農業を主とし、人格・性情の陶冶を主たる目的としていたことは全国の感化院・少年教護院の一般的な傾向であったが、こうした実科の実態を、全国の職員たちはどう捉えていたのであろうか。長崎開成学園長の横田三之助（?-1967）は、少年教護院の実科は将来の職業教育に役立たないという考えは誤りだと述べている。すなわち仕事を通して苦痛に耐え、黙々と汗を流して働くことを学ぶことでどのような職についても立派な国民として奉公できるのだという（横田［1941］37-38）。したがって農業を習得した者が農業者にならなくてもよい、職工になっても理髪師になってもよいと主張した（横田［1941］38）。つまり横田は、実科の目的はあくまで自活に結びつけるためではなく、勤労精神の育成であると考えた。しかし、多くの感化院では職業教育の必要性も認識していた。佐賀県立進徳学校は収容定員35名の小規模な施設

であったため、実科は農業ができるのみであった。学校長の御厨勝一（1876-1954）は、児童の個性に応じ多数の実科種目を取り入れて職業的訓練をなすことが最も望ましいとしながらも、適性適職の指導方法を立てることはかなわず、農業に重きを置かざるを得なかったと述べている（御厨［1941］16）。また、山口県立育成学校の末宗殷門（1882-?）と野村太四（生没年不詳）は、育成学校が収容定員30名だったころは実科は農業一本で忍ばなければならなかったが、定員65名に拡大した現在は農業と工業とを実科として採用できるに至ったとしている。しかしながら1940（昭和15）年当時、「人的資源欠乏」のために農業とは異なり工業教師の有資格者を雇用できず、やむなく無資格者を代用していることを「遺憾」と述べている（末宗・野村［1940］60）。佐々木（2012b）も指摘しているように、木工、印刷、洋裁などを実施しようとすると、指導できる専門者、作業室、運営費用などの確保が必要であり容易ではなかった（佐々木［2012b］186）。東京の萩山実務学校長を務めた島田正蔵（?-1960）も、実科の種類が少ないために院内で適性適職の指導ができず、退院後に延長しなければならないこと、在院中の実科と退院後の職業の関係が微弱であるため、「少年教護院に於ては職業教育も精一杯やれないし、個性認識としての職業指導も極めて曖昧」と嘆いた（島田［1940］55）。

感化院・少年教護院の実科は、職業技術の取得よりも人格・性情の陶冶、勤労精神の養成、不良の改善などを目的に農業を主に行った。しかし、職業教育の実施や様々な適性に応じた職業選択に繋がる、農業以外の実科を取り入れることも望まれていた。にもかかわらず農業が実科の中心となり続けたのは、人格・性情の陶冶や不良の改善に農業が効果的であると認識されていたほか、農業以外の実科はやりたくても施設によっては実施が困難であり、農業であればその他の実科に比べ実施しやすいという要因があったためである。大阪府立修徳館の熊野隆治（1882-1975）は実科は感化の手段とすべきでそれに幾分職業教育の意味を加えるべきだとしており、国立武蔵野学院長の菊池俊諦（1875-1972）も賛同し、教育主義と職業主義との折衷を取ると述べた（富山県［1931］27）。しかしながら、熊野は後に国立武蔵野学院長となってから、実科を自活に結びつける重要性を主張するようになる。熊野は少年教護院に精神薄弱児が多いこと、年少者が増えていること、気が変わりやすく一定の職に就きにくい子が多いことから、自活に結びつく教育がし難いと述べている。したがって、いかなる子どもであってもでき、特殊の設備や教師を要しない農業が選ばれるのはやむを得ないことだとした（熊野［1941］7-8）。しかし、基礎的陶冶だけでは物足りない、彼らを「独立自営」まで築き上げなくてはならないとも述べている。すなわち、農業だけを行うのであれば少年教護院の経営も安楽で健康や情操陶冶にも効果があるが、実際に退院後農業に従事する者は極めて少数であり、自活のためには農業以外の実科が必要であると主張した。だがそれは20人、30人の小教護院では困難なことだとも述べている（熊野［1941］7-9）。いずれにしても感化院・少年教護院だけで自活できるだけの職業技能を身に付けることは難しかった。また、大正末期にはすでに、農業は不利益でありこれからは工業の世であると述べる感化院職員もいるなど（感化教育会［1925］197）、農業は職業として成り立たないと考えられるようになっていたと思われる。以上の理由から、人格・性情の陶冶は実科の目的として欠かせなかっただけでなく、実科の目的に人格・性情の陶冶を置かざるを得なかった。

昭和戦前・戦中期の多くの感化院・少年教護院で農業がその他の実科より実施しやすかった理由はさらなる検討が必要である。まず、明治期からの継続で敷地や教師が確保されていたことが理由として挙げられよう。農作物を子供たちの食事に活用したり、販売して売り上げを子どもの貯金としたり府県の歳入とできたことも、農業が感化院・少年教護院の実科として好ましかった理由と思われる（富山県立樹徳学

園，1939)。さらに、農業は普通以下の知能を有する者や「知能低格」な者にとっても最適な作業と考えられていたことも（池田［1939］72; 佐々木［2012b］180-185)、農業が実施しやすかった大きな理由であろう。

しかし、職業教育が不要と考えられていたわけではなく、実施が可能な施設は職業教育を行い、そうでない施設は職業教育の方法を模索した。また、職業教育の実施が困難な理由としては、施設規模が小さいことが挙げられることが多かった。

Ⅳ．職業教育の実現とその背景

1．授産場の設立と職業教育の実現

それではなぜ樹徳学園では施設規模が小さい時期から職業教育を開始することができたのであろうか。後援機関として樹徳学園の職業教育を担ったのが、1917（大正6）年に設立された成徳会である（富山県成徳会［1936a］3-4)。1929（昭和4）年頃の成徳会は、退園した者が再び不良化することを防ぐために必要であるが公費では支弁し難い事業の実施を目的としていた。たとえば退園した者が疾病の際に医薬を給する、職場を解雇された際に一時的に滞在させる、上級学校へ入学させて学費、食費などを給与する、などであった（富山県立樹徳学園［1929］26-29)。成徳会は1929（昭和4）年に、授産場となる会舘を樹徳学園内に設立、職業教育としてミシン裁縫に着手した（富山県立樹徳学園［1931］30; 富山県成徳会［1936a］3)。樹徳学園に在園する子どもの中から境遇や適性を考慮して選抜し従事させ、多年の経験を有し技術の優秀な者を顧問とし、熟練の教師が指導する体制をとるなど（羽柴［1933］19)、本格的な職業教育をしようとしたことが窺われる。成徳会は仮退園した子どもを受託して職業教育を行ったほか（定塚［1937］26)、仮退園前の子どもにも実科としてミシン裁縫を行った（富山県［1931］43)。

成徳会のミシン裁縫は1932（昭和7）年には2,000円の収益を上げた（羽柴［1933］19-20)[3]。さらに、1936（昭和11）年までに数名の自活者も出したほか（富山県成徳会［1936a］8)、成徳会に収容されていた子どもの一人が助手に採用されるなどの成果を見せた（羽柴［1933］20)。ミシン裁縫の開始から7年後の1936年（昭和11）年には、成徳会支出予算額の3分の2を洋服裁縫（ミシン裁縫）部の収入予算でまかなうに至った（富山県成徳会，1936b)。実は、樹徳学園が奥田村稲荷から浜黒崎村に移転後も、成徳会は奥田村に残っていた。これはミシン裁縫の事業は富山市を中心に行っていたため、市を離れては経営ができないと考えられたことと、子どもの委託も富山市が中心であったためである。そこで、富山市の中心部に近い奥田村の授産場はそのまま成徳会支部として残し、新たな移転先である上新川郡浜黒崎村の敷地内でも別に一棟新築してミシン裁縫の基礎を行い、見込みある者を支部へ送る計画となった（羽柴［1933］20)。ただし、結局は1936（昭和11）年に富山市赤江に授産場を新築し、奥田村の建物も残され1939（昭和14）年頃には職員居室等に用いられている（富山県社会課［1939］55)。この時の赤江での授産場新築により、西洋洗濯も授産場で開始されたのである。西洋洗濯は「体力のみを取柄とすべき少年」（定塚［1935］16）を対象としており、ミシン裁縫や他の業務ができない子どもが行ったものと思われる。西洋洗濯もまた成徳会で洗濯教師が雇用され、子どもを指導した（財団法人富山県社会事業協会［1937］64)。なぜ成徳会ではミシン裁縫だけでなく、西洋洗濯の授産場も設立したのであろうか。成徳会では、全ての子どもを同一の職業につけることができないことはよく認識されており、それぞれの適性に応じた職業選択が重要であると考えていた（富山県［1935］19)。そのため成徳会の授産場も複数の職種を希望し、ミシン裁縫と西洋洗濯の二種を実現したのである。

職業教育の実践は、京都府立淇陽学校や大阪府立修徳館では大正期から行われていた。施設内で職業教育を行ったのが京都府立淇陽学校である。ミシン裁縫、木工、竹工、縄ない、農業を自活の「職業準備教育」とし、活版印刷は

「純職業教育」として目的を区別していた。そして活版印刷については退院の翌日から印刷工として日給を得ることを目指した（感化教育会［1929］202-204）。また、大阪府立修徳館では、実科の目的に陶冶と将来の職業の二つを設け、前者のためには木工、農業の二科目を、後者のためには樹徳学園と同様に後援機関である修友会で裁縫を授けた（感化教育会［1929］202）。大阪府立修徳館は全国最大の定員数を持つ施設であったが、職業教育の実施にあたっては後援機関を活用していたという点で樹徳学園と類似している。

しかしながら、こうした職業教育は、昭和初期においては全国的に普及しているとは言えなかった。たとえば九州沖縄地方では木工およびミシンによる職業教育を開始する計画があったが具体的な実践はほとんどなかった。熊本県では800円の費用をかけ職業教育を試みるも失敗するなど、職業教育の実施を願うも失敗や情報収集に留まっていた（感化教育会［1928a］114-116）。一方福井県はより「純職業的」であり、「職業的色彩がもっと濃厚な」形で木工、農業、ミシン裁縫を行っていた（富山県［1931］43）。ミシン裁縫は後援機関が主に行っており、農業は主に農家出身の者を対象とした（富山県［1931］43）。石川県でも大正期から1927（昭和2年）頃までには後援機関での授産事業としてのミシン裁縫が成立した（石川県育成院共済会［1932］3-4）。樹徳学園が職業教育を開始した1929（昭和4）年前後は、職業教育はまだ全国的ではなかったが、富山、福井、石川など北陸地方では後援機関を活用することで職業教育の開始が見られたのである（感化教育会［1931］1-26）。このように、人格・性情の陶冶よりも将来の職業に結びつけることを目的とした職業教育を実施する施設も見られたが、その内容は活版印刷やミシン裁縫であり、農業を職業教育としたわけではなかった。将来の職業としての道は農業以外に可能性が見出されていた。

以上のように樹徳学園では、規模の拡大というよりも、洋服洗濯のような大規模施設だからこそ可能となると考えられていた職業教育に結びつきやすい作業を、施設規模が小さかった時期から導入することで職業教育を実現したのである。その背景には、成徳会という後援機関の存在が大きかった。樹徳学園の実科および職業教育の変容は、農業を実科として継続しつつ職業教育も実現するという課題を、人格・性情の陶冶を目的とした農業を院内で、自活のための職業教育を授産場および家庭への委託でと分化することで解決を図った過程と言える。

授産場開設から10年を経た1940（昭和15）年度、1941（昭和16）年度の2年間で、ミシン裁縫は10名、西洋洗濯は3名が授産場に受け入れられている。無事修了には至らなかった者も少なくなかったものの、2年の間に明治以降農業に進んだ者とほぼ同数の者を受け入れ、授産場は一定の期間職業教育の場として機能し得たと言えよう（富山市社会課［1943］42）。

2．後援機関による職業教育の実施と地域の支援体制

樹徳学園および成徳会は、なぜ授産場を設立したのであろうか。彼らは、子どもを家庭に帰すことを理想としていた（富山県［1935］17）。しかし、前科を持つ家族、継父継母の存在など子どもにとって有害とされた家庭であったり、帰るべき家庭を持たない者もおり、家庭に帰すことが困難な場合が多かった。また、他家への委託は委託先の職業や性格を慎重に見定める必要があり適当な委託先を見つけることも容易ではなかった。そのため授産場が必要となったのである（定塚［1935］15-18; 富山県成徳会［1936a］5-6; 富山県［1935］17-19）。しかし、全国の全ての施設がそうだったわけではない。1931（昭和6）年から1935（昭和10）年まで樹徳学園長を務めた定塚正雄（1880-?）が、1931（昭和6）年の北信五県感化教育研究会で適当な委託先を見つける良案について尋ねた際、福井県立金橋学校長は、福井の場合は委託の申込みが多く自然と十分に選択ができるため委託先を探す必要を感じたことはないと回答している（富山県［1931］11）。また、大阪府立修徳学院

も大都市にあることから職業を授けるのにさほど不便を感じていなかった（富山県［1931］12）。福井県や大阪府とは異なり、適当な委託先を見つけることが困難であった富山県では、授産場の需要はより高かったと思われる。

成徳会は授産場を始める以前は、県の助成金のほか財政を寄付等に頼る部分が大きかった。1923（大正12）年、1925（大正14）年に宮内省から御下賜金、内務省より奨励金を下附され会が設立された。その後1929（昭和4）年に富山県より高等女学校宿舎の一部を無償交付されたほか、授産場設立にあたって恩賜財団慶福会や三井報恩会の助成を受けた（富山県成徳会［1936a］3-4）。このほか1925（大正14）年より会員組織となり、名誉会員、特別会員、通常会員に分け会費を徴収した。1936年（昭和11）年の名誉会員は11名であり、侯爵前田利為（1885-1942）、渋澤栄一（1840-1941）のほか、富山県の有力者や元樹徳学園長の名前が並ぶ。その他の会員は約200名であり、樹徳学園の所在地である浜黒崎村の者が多いほか、上新川郡、下新川郡、富山市内などから幅広く会員が集まっていた（富山県成徳会［1936a］11-18）。

また、授産場で技術を教える教師にはその道の熟練者を得ることができた（羽柴［1933］19）。1933（昭和8年）以降は、樹徳学園が移転したため樹徳学園と成徳会の授産場が離れてしまったが、県の社会事業主事がその妻を保母として伴い授産場のある会舘に止宿して、移転に伴う支障に備えた。さらに、樹徳学園の職員や退職した元園長、元保母らが成徳会の業務を担った（富山県成徳会［1936］3-4）。成徳会と樹徳学園は職員を共有し密着した関係であった。

このように、後援機関で授産場設立に必要な財政的支援が得られたこと、職業教育に必要な技術の専門家や樹徳学園の目的を理解する職員が得られたことにより後援機関での授産場設立が可能となったと言える。こうした支援は、全国の全ての感化院・少年教護院で可能だったわけではない。大阪府や富山県以外の北陸地方の施設でも職業教育に後援機関を活用していたが、1930（昭和5）年頃では半数近くの府県が感化院の後援機関を持っていなかった（社会局［1930］72-75）。

職業教育に一定の成果を得た成徳会であったが、その後、会の勢いは衰えを見せるようになる。1933（昭和8年）の樹徳学園移転以降、学園とは別の場所に設置されたことから、樹徳学園を後援することが難しくなっていった。そして1942（昭和17）年の企業整備令によりミシン裁縫は廃止、さらに1945（昭和20）年の空襲被害を受け1946（昭和21）年に富山県成徳会は解散となった（富山県立樹徳学園，1947）。

V．結語

1929（昭和4）年頃までの樹徳学園の実科は人格・性情の陶冶を主な目的として農業を中心に行っており、職業教育に結びつくものではなかった。しかし1931（昭和6）年頃には自活の基礎を得ることも目的として重視されるようになった。その背景には宮内省、内務省から資金を得て設立された後援機関において、ミシン裁縫の職業教育を行うようになったことがある。職業教育は1936（昭和11）年には「体力のみを取柄とすべき少年」（定塚［1935］16）を対象とした西洋洗濯が加わり、子どもの適性に応じた職業教育を実施しようとした。ミシン裁縫および西洋洗濯は、樹徳学園において職業教育の対象とはならなかった農業に比べれば、一定の成果が見られた。樹徳学園の実科は、農業を継続しつつ職業教育を実現するという課題を、人格・性情の陶冶を目的とした農業を院内で、自活のための職業教育を授産場および家庭への委託でと分かれることで解決を図った。すなわち、実科の目的のうち職業教育が、実科から分化する過程を取ったと言える。

実科で農業を主とする傾向は全国でも共通して見られ、農業は我が国の感化院・少年教護院で広く行われていた。しかし多くの場合、樹徳学園同様に人格・性情の陶冶、不良行為の改善、勤労精神の育成といった目的であり、農業を自活の手段とすることが目指されていたわけでは

かった。職業教育の対象ではなかった農業が多くの施設で実施されたのは、農業が感化院・少年教護院の子どもに向いている、人格・性情の陶冶という目的にとって最適であると考えられていたほか、他にできる実科が希薄であったために農業を実科として行わざるを得ないためだった。しかし、職業教育を重視していなかったわけではなく、その重要性は認識されており、実科の目的には職業教育を含めるという考えがあった。そして、職業教育が可能な施設では実施されたほか、多くの施設で広く模索されていた。ただし、それは農業ではなく、ミシン裁縫、活版印刷、西洋洗濯などを通してであった。また、職業教育にあたっては、子どもの適性に応じるため複数の内容を実施することがより適切とされた。

樹徳学園は成徳会を通して、下附金や民間の助成金を資金とし、技術の専門家や樹徳学園の目的を理解する職員を確保し、後援機関において授産場を設立することで職業教育を実現した。つまり、職業教育の実施は施設規模の大小だけでなく、職業教育の対象とできるような実科を実践しようとする意欲の有無、寄付金や地域からの支援を得られるかによっても可否が変わってくると言える。すなわち、職業教育が可能な施設や教師の確保、そのための財政力、専門知識を持つ者の理解である。一方、このような支援を得られない感化院・少年教護院にとって職業教育の実施は困難であった。

今後の課題としては、昭和戦前・戦中期だけでなく明治・大正期における、農業をはじめとする実科および職業教育の位置づけを明らかにする必要がある。

註

1）当時の少年教護院で実施されていた知能の測定方法としては、1937（昭和12）年に石川県育成院で使用されていた鈴木式のビネーシモン法などがある（石川県少年教護協会［1937］2）。樹徳学園の子どもについては1931（昭和6）年頃から県の師範学校で精神検査を受けており（富山県立樹徳学園［1931］22）、この時に知能が測定された可能性がある。当時の知能検査の課題に関する研究としては杉田（1939）などがある。

2）富山成徳会は1936（昭和11）年に、富山県成徳会に名称変更した（富山県成徳会［1936a］4）。

3）前年の1931（昭和6）年度における樹徳学園の予算は9,523円であったから、成徳会のミシン裁縫は樹徳学園の予算の約5分の1に相当する収益を得たと言える（富山県立樹徳学園［1931］4）。

文献

定塚正雄（1933）方面委員と樹徳学園並に富山成徳会．社会，3(2)，14-22.

定塚正雄（1935）児童と職業教育―富山成徳会の授産場建築に就て―．社会，5(12)，15-18.

定塚正雄（1937）少年教護網の完成に就て．社会，7(6)，22-28.

長谷川仏教文化研究所/淑徳大学アーカイブズ編（2011）近代日本における感化教育の黎明期―東京感化院と千葉感化院―平成23年度淑徳大学アーカイブズ特別展感化院．淑徳大学長谷川仏教文化研究所.

羽柴茂治（1933）富山成徳会の事業（二）．社会，3(7)，19-22.

池田千年（1939）少年教護院に於ける精神薄弱児童の問題．児童保護，9(7)，70-73.

石川県育成院共済会（1932）共済会要覧．石川県育成院共済会.

石川県少年教護協会（1937）石川教護時報，120，1-4.

感化教育会（1925）第一回感化教育会総会．感化教育，5，185-199.

感化教育会（1926）関東北感化院長協議会議事録．感化教育，7，118-137.

感化教育会（1928a）第十二回九州沖縄各県感化院長会議々録全国感化院年報．感化教育，11，92-127.

感化教育会（1928b）全国感化院年報．感化教育，12，75-90.

感化教育会（1929）愛知以西二府十六県感化院職員協議会記録．感化教育，14，164-228.

菊池俊諦（1943）全国少年教護院に関する調査．二井仁美編（2009）子どもの人権問題資料集成（戦

前編）第6巻．不二出版，332-355.
厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課（2014）児童自立支援施設運営ハンドブック．厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課.
熊野隆治（1941）教護院に於ける実科教育の新使命，11(8)，7-15.
御厨勝一（1941）院生の実科教育の実情を語る．児童保護，11(8)，16-21.
長野県波多学院（1930）保護児童と学院の教育．長野県波多学院.
長沼友兄（2011）近代日本の感化事業のさきがけ―高瀬真卿と東京感化院―．淑徳大学長谷川仏教文化研究所.
二井仁美（2010）留岡幸助と家庭学校：近代日本感化教育史序説．不二出版.
佐々木光郎（2012a）昭和戦前期の少年教護実践史（上）．春風社.
佐々木光郎（2012b）昭和戦前期の少年教護実践史（下）．春風社.
佐々木光郎・藤原正範（2000）戦前感化・教護実践史．春風社.
島田正蔵（1940）少年教護院に於ける生徒指導方法に就て．児童保護，10(10)，53-57.
末宗殷門・野村太四（1940）実科教育に於ける生徒指導方法に就て．児童保護，10(10)，58-72.
杉田直樹（1939）精神薄弱の程度に依る分類．精神衛生，(6)，6-18.
社会局（1930）感化事業回顧三十年．社会局.
田澤薫（1999）留岡幸助と感化教育―思想と実践―．勁草書房.
東京都立萩山実務学校（1951）萩山実務学校五十年史．萩山実務学校.
富山県（1931）北信五県感化教育研究会記録．富山県.
富山県（1935）本県少年教護事業と其の実際．富山県.
富山県立樹徳学園（1929）富山県立樹徳学園要覧．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1931）富山県立樹徳学園要覧．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1933）富山県立樹徳学園の施設．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1935）昭和10年度行事表．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1936）富山県立樹徳学園要覧．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1939）富山県立樹徳学園一覧表．富山県立樹徳学園.
富山県立樹徳学園（1947）少年教護沿革史資料．富山県立樹徳学園.
富山県立富山学園（1989）松風―創立80周年記念誌―．富山県立富山学園.
富山県立富山学園（2009）松風―創立100周年記念誌 平成21年度年報．富山県立富山学園.
富山県成徳会（1936a）富山県成徳会の事業―児童保護団体―．富山県成徳会.
富山県成徳会（1936b）役員会協議事項．富山県成徳会.
富山県社会課（1939）富山県社会事業要覧．富山県社会課.
富山市社会課（1943）富山市社会事業概要．富山市社会課.
山崎由可里（1999）感化院長会議等にみる障害児問題の展開―国立感化院設立（1919年）から少年教護法制定（1933年）まで―．特殊教育学研究，37(2)，1-12.
横田三之助（1941）本園に於ける実科教育．児童保護，11(9)，37-47.
財団法人富山県社会事業協会（1937）成徳会教師退職．社会，7(6)，64.
全国教護協議会編（1964）教護事業六十年．全国教護協議会.

―― 2016.8.29 受稿、2016.12.16 受理 ――

J. J. Disa. Sci. 41, 121 − 133, 2017

The Factors of the Differentiation of Vocational Education from Practical Education in the Reformatory of Toyama Prefecture Before and During World War II in the Showa Period

Tomoko TACHINAMI

The purpose of this study is to clarify the factors of the differentiation of vocational education from practical education in the reformatory of Toyama Prefecture before and during World War II. Jutoku Gakuen, the reformatory of Toyama prefecture, provided children in the reformatory with practical education in farming in order to cultivate their character, rather than to train them as farmers, because the teachers believed that farming and nature could rehabilitate them. As vocational education, Jutoku Gakuen provided them with sewing and laundry training in the workshop even though such education was not common in other reformatories in Japan. The reason Jutoku Gakuen succeeded in providing children with vocational education is the differentiation of cultivation and vocational education by founding the workshop with financial support and teaching assistance from the community.

Key words: Toyama Prefecture, reformatory, practical education, vocational education

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba